

元龜・天正頃の軍歌

小池藤五郎

(一) 軍歌研究の発端

恩師藤村作先生(東京大学教授。国文学。近世専門)に、嘗て、次のような事を申し上げた。

「私は国文学研究で、オリジナリテイのあるテーマと研究とが願いです。人の説の表面をなで、僅に変わった形にして、それを研究と名づけて発表したくはありません。あの本にはAとある、この学者の説はBである。だから $(A+B)\frac{1}{2}$ 説が自説だといった、チャンポン説をも避けたいものです。何とかして学者の知らない新史料、珍しい資料を掴み、新説のC説を立てたいものです……」。青二才のこの客気虚張の言を、先生は笑われた。「誰もが願う処だが、そうした事は、たやすく出来るものではない。第一に新史料を発見しなくてはならず、新資料が何処に潜むかも不明である。搜索の為に図書館・蔵書家・古典商を訪れ、又新資料の購入には、大金がかかる。よほどの犠牲を覚悟しなくては、米粒ほどの発見も出来がたいなァ……」と、おさとし下さった。ところが無礼にも、「犠牲は覚悟しています。図書館の書架の下で倒れる覚悟で、ぜひ実行したいものです」。

こんな対話があった後、すでに五〇年は過ぎてしまった。反省してみると、西鶴・京伝・馬琴などに関する発見や新説、江戸草紙中の新発見作品、興(狂)歌や、童話古文献の研究による発見、武田流の独創的の花押、韻鏡反切による花押の検討などと、いずれも犠牲覚悟、オリジナリティを願っての、我を忘れての研究であった。

私の願いの独創的という条件には、ピタリと合致するようだが、その研究と発表とを、今日まで秘めて置いた一事項は、明治以前、特に『元龜・天正(一五七〇—一五九一)頃の軍歌の研究』である。

軍歌といえば、明治時代、特に日清・日露・日独・世界大戦と、山程の資料があるが、私の狙いはそれらではない。江戸時代・鎌倉室町時代、NHKですでに演じた『国盗り物語』の頃の、戦場で白刃をかざしつつ歌った、その歌をつかんで見たいのであった。織田信長が軍を進めた時、武田信玄が戦闘に突入する前、何を歌わせ、何と叫ばせたか。それらを知ろうと、必死になって捜した。しかし収穫は皆無である。然らば軍歌は無かったかというところ、私には手持として、元龜・天正時代の軍歌らしい物が僅にある。この僅の史料が因果の種で、私の研究への執着心を、特に刺戟し続けた。こうした一例として、謡曲の『実盛』を口ずさんでみる。

……あっぱれ、おのれは日本一の、剛の者と、くんでうずよとて、鞍の前輪まへわに押しつけて、首かき切って、捨て
ゝけり……」

馬上で、朗々と吟ずれば、率いる一隊の将兵を鼓舞し、軍歌ともなる。又、『田村』の、

「……あれを見よ不思議やな、あれを見よ、不思議やな。味方の軍兵ぐんびやうの旗の上に、千手観音の、光をはなつて虚空ひきやうに飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霰ひとたひはなとふりかゝって、鬼神の上に乱れ落つれば、ことごとく矢先にかかって、鬼神は残らず討たれにけり。ありがたし、ありがたしや……」
これは、鬼神を敵に見立て、千手観音を加護の仏神とすれば、軍歌に代用できる。さらに『八島』の義経の弓流し

のあたりなどは、「弓を惜むに非ず、名を惜しむ」の内容で、軍歌的と言える。すなわち、

「……されば此弓を、敵に取られて義経は、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極と思ふべし……」

魁偉の体格、絶倫の武力、勇力を誇示し、敵を威圧することが戦闘に入る前の普通の方法だ。これこそ自己をも、味方の他人をも激励する軍歌のききめである。

謡曲の修羅物は、確かに軍歌に代用出来るが、これは教養の高い首脳部だけのものである。一兵卒には、代用軍歌としては、程度が高すぎる。また『幸若舞曲歌謡』中の、『十番斬』、『満仲』なども同様である。かの『敦盛』の、

「人間五十年、げでんの内をくらぶれば、夢の如くなり、一度生をうけ、めっせぬ者のあるべきか」

は、信長がこれを一さし舞った後で、田楽狭間へ出陣したとされている。つまり「信長の代用軍歌」であるが、信長は生者必滅、死の覚悟を、自己と側近の部将・重臣の僅かな人々に、確認させただけで、下級の兵士は、その事を全く知らず、又知ったにしても、人生無常の内容では、闘志を爆発させることにはならない。

明治以前の軍歌の研究は、記紀・万葉や軍記物、謡曲などの僅の資料を除けば、資料難の大氷壁に突当り、どうにもならない。情なくなつたが妙案は浮ばず、手持の物だけでもと思つてもみた。ところが、この手持資料も、東京高等学校教授時代に副本を作つて置きながら、原本・副本共に戦火で失われてしまった。ただしそのうちの数篇だけは、暗記していたといったあわれなさまである。

(二) 軍歌とは何ぞや

堀内敬三氏は『日本の軍歌』の書名で、明治以後の物について説く

(昭和一九年、日本音楽雑誌社出版)

また氏は『定日本の軍歌

(昭和四四年、実業之日本社出版)を出版し、佐佐木信綱博士も自作の軍歌を、『軍歌選集』(昭和一四年、中)として刊行している。堀内氏の『日本の軍歌』には、

日本は明治以来、幾度も強敵に向ひ、強敵を倒した。幾度も国運を賭して戦い、つねに国威を宣揚した。いま生きてゐる日本人は、みな戦いの烈しい嵐に鍛へられて育つて来た。軍歌はその嵐の中で力強く叫んだ日本国民の突貫の声であった(『日本の軍歌』(昭和一九年出版))。

と冒頭にしるし、日本人が軍歌に愛着をもつこと、軍歌は国民の歌であること、敵愾心の表現であることの三点をあげる。更に音楽史上の形式からは唱歌、歌詞は新体詩であるとする。これが堀内氏の軍歌の定義らしくも受取れる。

これ等の諸点は、明治になって発達した所謂「洋風軍歌」には、あてはまる所もあるが、『記・紀』中の「久米歌」、「万葉集」中の防人の歌、また大伴家持の歌など、音数律その他、ひどく違つてゐる。さらにそれ等から下つて、すでに私が発見しておいた元龜・天正時代の軍歌らしい歌謡などは、長歌調・謡曲調・短歌調・幸若調・今様ぶりなどで、必ずしも明治の「洋風軍歌」の如くに、歌詞の新体詩論のみで片づかない所がある。私の考へる軍歌は次の如くである。

- 一、正義と信ずる所を擁護し、邪悪撃滅を目的とし、国・郷土・眷族・民衆等を守護する精神、自己の武力の優越と、戦へば必ず勝つといつた信念を歌う。
- 二、最悪の場合の戦闘突入を、常に予想し覚悟する。
- 三、「討ちてしまはん」の敵愾心に油を注ぎ、その結果、戦闘力を増加させる目的をもつ。
- 四、七生報国の信念と、死への悟入を熱血的に沸騰させる。

五、明朗爽快で、誰にも楽に歌え、歩調に合い、行軍が快適に出来るように作曲されている。

軍歌は実戦へ突入の前奏曲である。明治・大正・第二次大戦前等の軍隊生活の突貫で指導される通り、「ワーツ」の喚声、エイ、オウの掛声以外に、闘戦場裏には歌詞は出て来ない。たゞ歌詞によって養われた信念のみである。

明治以前は和風軍歌調、明治一〇年以後は洋風軍歌調、その中間が、和風軍歌調にわずかに洋風を混じりもので、それが『都風流とことんやれぶし』と思われる。「とことんやれ節」中の和風軍歌調に、輸入教練の鼓笛隊のリズムが加わり、これが文明開化の軍歌調として、当時の人々に喜ばれたものである。作曲者大村益次郎（陸軍大輔、明治二年暗殺） 説なども鼓笛隊の調子から来ているものか。

（三）『閑吟集』と『隆達小唄』の諸資料

この二部は、歌謡資料としてあまりにも有名であるが、この二資料中に、軍歌めいた物は、全く見当たらない。『閑吟集』は永正一五年八月の漢文の序、その後和文の序を持ち、筆者は「桑門」、その住所は、富士の遠望をたよりに庵を結んでいたという記事で、大体は想像出来る。又、琴・尺八をもてあそんだことも知られる。そして老年となり、思い出に、若い頃から口ずさんだ歌謡三百十首余を書留めた物が『閑吟集』であるが、筆者名はない。

清見寺へ暮れて帰れば、寒潮月を吹いて袈裟にそそぐ。

と記す事から、興津の清見寺あたりに住む僧かと思われる。これには、

▽花の錦の下紐は、解けてなかなかよしなや。柳の糸の乱れ心、いつ忘れうぞ、寝乱れ髪の面影。

の如き恋愛歌謡が主で、また僧侶好みの歌が加わり、軍歌的の片鱗さえも認められない。永正一五年は美濃国の守護職土岐政房の長男頼純、次男頼芸（よりのよし）、斎藤道三（長井新九郎政利）、織田信長の父信秀らが、抗争していた時代であ

る。この時代に軍歌が無いとしたら、全く啞おしの合戦であって、そんな事があるはずはない。

隆達節の原本は、所載の歌謡の数が様々で、多数の異本があることは、高野辰之博士の指示された如くである。

隆達の時代は豊臣秀吉・秀頼時代で、『閑吟集』より後年である。筆者の高三隆達は堺の人、出家して堺の願本寺（法華宗）にいら、天正一八年還俗して家業の薬種商をついだ。生れつきの美声で、それ以前の歌謡をもとに、新風の小歌を歌い出したが、これが世に歓迎され、秀頼からも、慶長四年に、その歌の一巻を召されたが、慶長一六年（一六一一）に歿した。

人としぎらば、うすくちぎりて、すゑとげよ。もみち葉を見よ、こきはちるもの。

のような歌で、軍歌は見つからない。この時代は、三味線がまだ、一般的に行はれていず、一節ひとよぎり切に合せて、隆達は歌ったものである。

『閑吟集』、『隆達節』以外の資料は、捜し当らず、江戸時代からそれ以前の古資料を捜しあぐんだ。歌謡にくわしい学者に、古い軍歌のことを聞いても、知らぬ存ぜぬであった。

(四) 『万葉集』・『古事記』の一瞥

武の家系の大伴家の家長、旅人の子の大伴家持には、『万葉集』中に、軍歌に近い物が無くてはならない気がするが、彼は武人よりも多感多情の創作家的政治家ゆえ、そのあまりに繊細な感情は、勇敢・素朴・武力で敵を圧倒する内容の軍歌の作詞には、適しない所がある。官職は兵部少輔で、「追三痛防人悲別之心二作歌一首并短歌」・「陳三防人悲別之情二歌一首并短歌」等から、彼の行き方は充分に知れる。後者は、

……島守しまもりに わが立ち来れば 柞葉はそばの 母の命みことは 御裳みもの裾すそ つみ挙げあ搔かき撫なで ちちの実みの 父の命みことは 柗網たぐづの

の白鬚しらひげの上うへゆ 涙垂なみだり 嘆なげき宣賜のたまばく 鹿児かこじもの ただ独ひとして 朝戸出あさとでの かなしきわが子……うつせみの 世
の人なれば たまきはる 命も知らず 海原の かしこき道を 島伝つたひ い漕こぎ渡りて あり廻めぐり わが来るまで
に 平たいけく 親おやはいまさね。恙つがなく 妻は待たせと……八十楫貫かぬき 水手整ととのへて 朝あびらき わが漕こぎ出でぬと 家
に告つげこそ。

右の如くに、防人に強く同情する。「大君の仕まけのまにまに」と口先では言うが、防人に召された事を悲しみ、国の
守護よりも、自己・父母・妻への私情が、大君に優先し、むしろ国防を第二次的にみている。『続日本紀、神護景雲
三年十月の詔』の、

東人は常にいはく、額ぬかに箭やは立つとも、背そむらには立てじといひて、君を一つ心にもちて護るものぞ。(続日本紀卷
三〇、称徳天皇)。

を内容とした歌ではない。さりながら家持は、大伴一族に向い、歴代祖先の功業を説いて、教へ諭し、
……虚言むなごとも 祖おやの名絶たつな 大伴の 氏うぢと名に負へる 丈夫ますらをの伴とも 磯城島の 大和の国に 明けき 名に負う伴
のを 心つとめよ

劍刀つるぎたち いよよ研とぐべし 古いにしへゆ 清さやけく負おひて 来きにしその名ぞ

と歌っている。この辺でようやく軍歌めいて来る。しかし大伴家持の、戦闘への認識は深くはなく、必死の戦闘の気
魄を表現出来ず、防人らの別離に過分に同情することが主流となる。戦闘においての、敵兵の殺戮による爽快味が歌
えず、文学者の繊細愛他の感情が捨てられない。今春部与曾布と大舍人部千文の二作を接続してみると、軍歌から、
望郷の抒情詩への動きが見られる。

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜みにくの御楯と 出で立つ吾は (与曾布)

は軍歌であるが、

霰ふり 鹿島の神を 祈りつつ 皇御軍に われは来にしを（千文）

与曾布・千文の歌は「こゝはお国を何百里」の近代戦争の感傷的の感覚を湛える。「高市皇子尊城上殯宮時」の戦闘部分なども、また同様のところである。

『万葉集』よりも『古事記』には、より軍歌的の歌が多い。これは神武東征に伴う歌で、弟宇迦斯の饗宴歌ではあるが、譬によつて、さわやかに軍歌的の行動と気魄を描く。

宅陀の、高城に、鳴網張る・我が待つや、鳴は障らず、勇細し、鯨障る。前妻が、魚乞はさば、立椶稜の実の、長けくを、我許稗多ね。後妻が、魚乞はさば、杓実の大けくを、幾許稗多ね。えゝしやこしや、あゝしやこしや。

しかし、これとても軍歌とは言えず、戦勝の祝賀の歌である。ついで「尾ある土雲八十建」を討つ時には、忍坂の、大室屋に、人多に、来入り居り、人多に、入り居りとも、みつゝし、久米の子が、頭椎・石椎もち、撃ちてしやまむ。みつゝし、久米の子等が、頭椎・石椎もち、今撃たば善らし。

と歌われた。これは士卒と共に、敵を攻撃する場合で、これこそは真実に軍歌である。ついで登美毘古を撃たんとした時には、

みつゝ、久米の子等が、粟生には、臭韭一茎。其根が茎、其根芽撃ぎて、撃ちてしやまむ。と歌い、兄君の五瀬命の仇である故に重ねて、

みつゝし、久米の子等が、垣下に、植多し薑、口響く、吾は忘れじ、撃ちてしやまむ。と歌われた。兄の命を殺された怨は深く、ついで、

神風の、伊勢の海の、大石に、はひもとほらふ、細螺の、いはひもとほり、撃ちてしやまむ。

上記の四編は軍歌と言える。この四編により、五瀬命を討たれた神武天皇の復讐心、敵愾心の強烈さがわかる。その感情は直接的に生薑しょうがの刺激として、「口にピリピリと感ずる意味」の「口響く」の言葉でよく表現され、素朴純情の軍歌として誠に尊い。こうした近親への純情は、後年の武士社会では、仇討の精神となる。

ついで兄師木えしき・弟師木おとしきを撃たせられた時は、天皇の軍が疲労した。この時に、次の歌によって軍兵に元気をつけ、希望をもたせられた。ただしこの歌は天皇が歌われ、軍兵が謹聴したのではなく、軍歌の本来として、共に謡い勇気を鼓舞した意味である。

楯たて竝なめて、伊那住いなの山やまの、樹この間まよも、い行きまもらひ、戦たかへば、われはや飢あぬ。島しまつ鳥どり、鵜う養かひが徒とも、今助いますけに来こね。

「今助に来ね」と歌った通りに、援助に邇芸にぎはやひ速日はやひの命が来られた。神倭伊波礼毘古かむやまといはれひこの命（神武天皇）に対して邇芸速日の命は、(一)天孫の降臨と聞き、後を追って高天原より降って来たこと、(二)天つ瑞しるしを奉ったこと、(三)神倭伊波礼毘古の命に奉仕すること——の結果となった。

高千穂の宮から白禰原かしはらの宮に入るまでの五瀬の命、神倭伊波礼毘古の命の進路は、戦闘の連続である。そこに上記の軍歌が生れ、その価値を發揮している。神武天皇の東征ならぬ有栖川宮熾仁親王の東征にも、将兵は黙々として歩いたのではない。かつての「みつくし久米の子等が……」の代用歌謡、代用軍歌がこの時に、現れていたようだ。『古事記』に発した純日本軍歌の展開が有栖川宮軍歌である。和風軍歌に文明開化を加味した『都風流とことんやれぶし』がその代表である。『古事記』以後、日本に軍歌がなかったのではなく、『国盗り物語』時代など、有り過ぎる程あったろうと想像される。ただしその資料が失われ、歌といえは恋愛歌のみにように考えられたのである。そこで意地になり、失われかけた『都風流トコトナヤレぶし』とその周辺の資料をも検討してみることにする。

(五) 明治最初の軍歌

今から一〇五年前の慶応四年(明治元年)四月頃は、東征大総督有栖川宮にひきいられた薩摩・長州・土佐をはじめとする二十二藩の兵隊たちが、江戸へ向って進軍していた。彼等は口々に「トコトンヤレ節」を軍歌として歌い、歩調を整えて進軍した。これには鼓笛隊のリズムが合っていた。この歌はまた、農・工・商の階級からの庶民兵募集にも、宣伝歌として利用された。歌ってみると、実に陽気で、 $\frac{2}{4}$ 拍子である。

メロディも内容も、青年・壮年・老年の男性の血をわかせる、文明開化を海の彼方や、横浜・長崎などに眺める日本人の耳に、「明治夜あけの歌」としてひびいた。文学史的に見ると、徳川政権のもとで、江戸草紙(大衆小説の軸の、赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻の総称)なる文学の広場で、士・農・工・商のコミュニケーションが、かなりに行われていた。江戸草紙中で流行を極めた仇討物の黄表紙の大偉力で、一君万民の思想が、庶民に理解し易い状態になって来ていた。そうした事情のもとで、「トコトンヤレ節」は、武士や庶民大衆を益踊り気分とし、気分の良さ、庶民は官兵としての募集にも応じ、庶民兵・武家兵ともに、踊る気持で江戸へ向って進軍するのであった。一般に「トコトンヤレ節」というが、正しくは『都風流トコトンヤレぶし』である。

一、▽一天万乗の みかどに手向ひ するやつを トコトンヤレ トンヤレナ ねらいはずさず ドンドンうち出す 薩・長・

土 トコトンヤレ トンヤレナ

二、▽宮さま宮さま お馬の前の ヒラヒラするのは 何じやいな トコトンヤレ トンヤレナ ありや朝敵 征伐せよとの

錦のみはたじや しらないか トコトンヤレ トンヤレナ

三、▽ふしみ・鳥羽、淀 橋本く(?) すハの たたかひは トコトンヤレ トンヤレナ 薩・長・土し(?)のおほきな

手がらじやないかいな トコトンヤレ
トンヤレナ

四、▽音に聞へし 関東さむらい どっちやへ逃げたと 問ふたれば トコトンヤレ
トンヤレナ 城もきかいも すてて東へ あづま

にげたげな トコトンヤレ
トンヤレナ

五、▽国をとるのも 人をころすも 誰も本意^{ほんい}じゃ ないけれど トコトンヤレ
トンヤレナ わしらが所の お国へ手向ひ

するゆへに トコトンヤレ
トンヤレナ

六、▽雨の降るよな 鉄砲の玉の くる中に トコトンヤレ
トンヤレナ 命もおしまず さきがけするのも みんなおしゆう

の ためゆへじや トコトンヤレ
トンヤレナ

の如き歌詞が六首で、その短かさ、簡単さ、平易さなど、兵士が歩きながら歌うに適している。音数律は、次の如くである。

(一) 八八五——七八五

(二) 八七八五——七八八五

(三) 七八五——七八五

(四) 七八八五——七七五

(五) 七七七五——八八五

(六) 七七五——八八七五

この歌詞の典型と見られる(二)の「宮さま宮さま」以外には、五音節・七音節・八音節の一乃至二の不足があり、新体詩の整然たる音数律とはいたく異なる。五音や八音の有無には関係なく歌える素朴さは、日本古歌謡の特色であり、『逸見古歌抄』・『甲斐盆踊歌』にも見られる。更に歌詞の本文について注意すべきは、(六)「雨の降るよな」……に、

みんなおしゆう（御主）の　ためゆへじや。
とあるのを、

みんなみかど（帝）の　ためゆへじや

と歌えないところ、更に、(五)「国をとるのも……」に於ては、

わしらが所の　お国へ手向　するゆへに、

とあるが、これこそは、まだ封建の夢が去らず、藩に割拠の証拠で、

みかどのおさめる　お国へ手向　するゆへに

と言ひ切れない所、『都風流トコトンヤレぶし』を歌う人々の感情・利害の複雑さが認められる。薩・長・土を中心とする藩兵・志士・兵隊たちからすれば、藩主に対する忠義の気持が、充分ぬけきらないためと私は見る。この『都風流トコトンヤレぶし』が、子爵品川弥二郎（後年の）が若かりし日のさかしらかと、疑われる点は、こうしたところにもある。

(六) 『流行トンヤレ節』は江戸生れ

一口に「トンヤレ節」と言うが、(一)『流行トンヤレ節』、(二)『トンヤレ唄』、(三)『都風流トコトンヤレぶし』の如く、三種類の原本がある。

第一の『流行トンヤレ節』は江戸うまれで、慶応元年（一八六五）以前から流行しだした歌である。横本二冊の原本で、慶応元年出版、本の体裁上からは、江戸における流行歌本形態と認められる。かの『都風流トコトンヤレぶし』が瓦版であるような一枚ずりとはちがう。

この本の表紙には、洋服姿で鉢巻をした男が、左膝をつき、右膝をたて、両腕を肩の高さで前方へ突出し、踊るさ

まが画かれている。上唇をつき出し、目尻をさげた笑顔で、この本の内容のトンヤレ節を歌っている様が表紙絵となっている。画かれた服装こそは、幕府の洋式調練兵の姿で、つまり幕兵の踊り勇んださまである。これこそは、足なみをそろえて、この歌を口にして行進する時の、心とリズムをうつしている。

▽トンヤレトンヤレ、鉄砲かついで、かりうとし 獵人鹿おうて、チヨチヨンがよんやさ。

▽トンヤレトンヤレ、トントンヤレヤレ、トンが何のその、トトンガよんやさ。

▽トンヤレトンヤレ、はやし 囃子に敗けずに、たぬき 狸は腹太鼓、たたいてよんやさ。

▽トンヤレトンヤレ、富士の巻狩、しし 頼朝鹿がり、チヨチヨンがよんやさ。

▽ドンタクドンタク、横浜がんきで、唐人がけん拳うつ、踊ってよんやさ。

右のような歌が、二冊に二四首納めてある。その中には、「フリチン、フリチン……」、「どぶろく、どぶろく……」、「謡ころ謡ころ……」などの如く、「トンヤレ、トンヤレ」以外の歌い出しの文句があり、幕末の世相を反映して、卑猥な内容のものもある。しかし「トンヤレ、トンヤレ」の歌い出しが多く、これがこの歌の特色である故、『流行トンヤレ節』という書名がつけられ、また歌謡の名称となつたらしい。「トンヤレ節」のはじまりについては、誰人も調べていないようだが、私は慶応元年の本書を、その最初の歌謡集と思つている。

(七) 志士の実際の姿と『紙張れ節』

越前福井藩主松平春嶽公(徳川幕府の政事総裁。明治政
府初代の民部卿で大蔵卿兼任)の側近が蒐集した『幕末史料十七冊』を家蔵する。これを調べつつ、幕末・明治の接点を私は考える。尊王攘夷派には、脱藩者が大部分で、かつ貧しい者が多かった。博徒・無頼漢・犯罪者などもかなり多く志士中には混入して、その年齢はいずれも若かった。彼らは女に飢えて、食も乏し

く、口にする歌謡には、低級卑猥の極といふべき内容の物があつた。不安・矛盾の世相、口には尊王を叫ぶが、その行動には売女・安酒・エロテイシイズムがつきまどつていた。彼等が酔つて歌う「紙張れ節」は、その一端を示している。

▽オメコに紙はれ、破れたらまた張れ。

▽ヘノコに紙きせ、破れたらまた着せ。

といった簡単な歌謡が、爆発的に大流行となり、若い志士たちは、居酒屋などで合唱するのであつた。このたわいもない歌謡の流行が、『松平春嶽公史料』中には、堂々と記されてい、流行の力の偉大さを示している。ところが、そのメロディは、記されていず、怒鳴りわめくといつた合唱調らしく、文久（一八六一—六三）頃から流行していた。この怒鳴りわめく調子が、かの元龜・天正頃の軍歌の、怒鳴りとわめきに通じるような気がする。

（八）『トンヤレ唄』

「トコトンヤレ節」を更に追究検討してみる。前記の『流行トンヤレ節』より少し遅れて、『トンヤレ唄』という流行歌が、同様のメロディで歌われた。これは『流行トンヤレ節』の歌詞を、大流行の波のまにまに、その倍の長さ
に引延した物で、一種の替え歌である。これは、

▽殿さん殿さん、お馬の股で、ブラブラするもナ、何じややら、こりやトンヤレトンヤレナ（下略。八、七、八、

五——これで一首の半分の長さ。以下特に卑猥）。

の如くで、現在残っている歌数は少く、内容は淫靡卑猥であるが、『都風流トコトンヤレぶし』の出現路線上では、貴重な史料である。というのは、この歌詞が『都風流トコトンヤレぶし』（特に前記語数律の（二））に、そっくりである。誰人が『都風流トコトンヤレぶし』を作ったかは不明だが、『流行トンヤレ節』のメロディを取り、「トンヤレ

唄」の歌詞を真似た事は確實である。無名の作家は、征東大総督の指揮下、錦旗を奉じた兵隊の中の誰人かで、「一
天万乗の……薩・長・土」とあるからには、薩・長・土三藩の者とも思われる。

(九) 薩・長・土を主体とした瓦版の挿絵

「トコトンヤレ節」と言われているが、正しくは『都風流トコトンヤレぶし』だった。これは一枚刷り瓦版、京都での出版である。

戦争をしている絵で、「丸に十字」の薩摩藩主の紋、「一に三ツ星」の長州藩主の紋、その他の紋が画かれ、この絵の上部に歌を六首摺出してある。江戸生れの『流行トンヤレ節』より三年以上後の、明治元年出版である。それ故に江戸出版の『流行トンヤレ節』の「流行」を、特に「都風流」と意識的に書きかえたと思われる。

結局、江戸生まれの初代『流行トンヤレ節』がまず江戸で歌われ、ついで二代目『トンヤレ唄』と共に、京・大阪でも歌われ、最後に三代目「都風流トコトンヤレぶし」が京都で生れて征東大総督軍の将兵に歌われ、軍歌となって、先祖の故郷の江戸へ突入して来た。誠に皮肉なこと、軍歌となった以上、『トンヤレ節』の性格は、平和的の物から、討ちてしまふの戦闘的の性格に変じた。江戸は、孫に当る三代目のトンヤレ節に向って開城した事になる。

(一〇) 品川弥二郎子爵と軍歌

橋本八郎の作名で、長州藩の品川弥二郎(旧子爵。後年の内務大臣、枢密院顧問官。一九〇〇年歿)が作り、作曲は祇園の芸者とする説、また大村益次郎(陸軍大輔。一八六九年歿)の作曲説などがある。それは『流行トンヤレ節』・『トンヤレ唄』の歌詞・メロディ、出版年などを、全く知らない為に、作曲などと大袈裟に言ったものと私は見る。祇園あたりの姉さんが、ふと三味線を伴奏

したというような処が、大きく伝えられたものか。品川家へ史料について問合せたが、絶無との事であった。

関東大震災と戦災とで、流行歌謡の資料が、大量に焼失し去った。しかも国文学の他の資料とは異なり、流行歌謡資料は、紙屑同様に取扱われて来た。そのために、幕末流行歌謡資料の蒐集者も稀で、調査研究は容易でない。

幕末の尊王攘夷派は、天皇を『玉』とよんだ。錦旗を奉じて東征する軍隊故に、あくまで天皇中心でなくてはならない。ところがこの点が歌詞には明確でなく、むしろ藩主を主体するが如き節がある。即ち「わしらが所のお国へ手向ひするゆえに」とか「みんなお主のためゆへじや」など、それぞれの国や藩主を持出している。これは、元龜・天正時代の軍歌の基盤に一致するようだ。

「一天万乗のみかどに手向い」と大きく出ながら、それで一貫出来ない処に、「明治夜あけの軍歌」としての、過去からの力と事実のこびり付きがある。「一天万乗のみかど」から「宮様宮様」と「錦の御旗」に移ったが、その後には、封建の夢が大きく残っている。作詞者がかもし品川弥二郎だったら、こうした歌詞上の矛盾はあるまい。多種多様、それぞれの夢もっている幕末志士の歌心が、いつの間にか『都風流トコトンヤレぶし』という一枚の瓦版になったもの、共同作詞の性格が多分に認められる。そして共同作詞の周辺には、

▽振りチン 振りチン ふんどし高くツで

しめずに儉約 ぶらチン ヨンヤサ (『流行トンヤレ節』)

の如き内容の流行歌がヒシメキ合っている、かまびすしく、歌われていた。とにかく、不満足ながら、この程度にまで、軍歌としての形態を整えたことは慶賀すべきである。

(一一) 『都風流トコトナヤレぶし』に続く軍歌

明治元年生れの私の父の小池吉章は、三、四歳から覚えたという軍歌を、よく歌った。

▽日清談判破裂して、品川乗出す東艦あずまかん

続いて金剛・浪速艦 国旗堂々とひるがへし

は、明治一八・九年頃、日清の国交（日清談判）が危険になった時の、軍歌的の流行歌である。

▽皇御国のますらはは 生きては建てよ勲いさおし

死しては残せ芳しきかんば 名を万代よろずよの末までも

月雪花と戯れて 回天旋地の大業を

立てしためしは荒波の 東西古今みな一つ

乞ふ見よ豊臣秀吉は 矢矧やはぎの橋に霜深く

結びし夢は如何いかにぞや 又見よフランスナポレオン

コルシカ島の島風に 破れし窓を春の雨……。

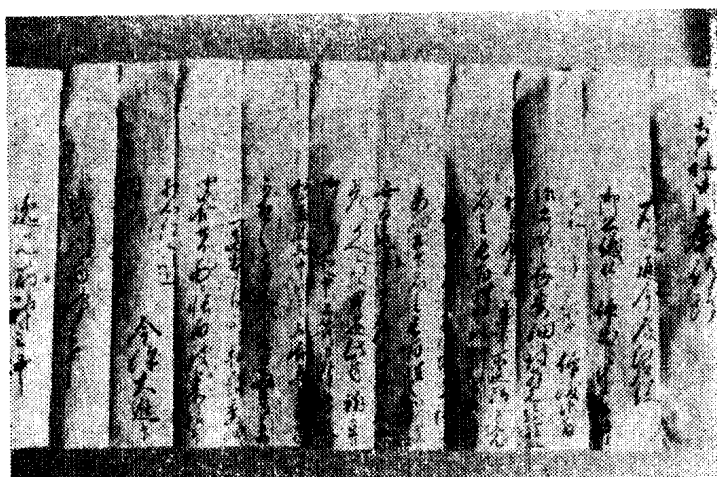
(教導団歌)

▽二千五百有余年 皇統連綿万国の

上に秀づる帝国に ほまれも高き近衛隊

頂く帽のその色に 赤き心を表わしつ

一重に八重に九重に かさなり守る二重橋……。



逸見・武川国学集団の神官への通牒

(近衛軍歌)

などは、明治一九年頃の物である。亡父のメロディーを真似して私が歌い、現在の東京音大の作曲科の諸氏にお聞きしたところ、大体にそんなものだろうとの事、別に楽譜は持たず記憶によって歌った。

これ等の歌より以前には、西南戦争があり、西南戦争の時の軍歌としては、『熊谷直実』（作者不明）、『都風流トコトシヤレぶし』その他の俗謡が、軍歌代用となったようだ。とにかく戦場へは、潜行の目的以外で、無言で進んだら、意気が銷沈する。歌わねば心はずまず、戦う勇気が出ない。

▽そもそも熊谷直実は 征夷將軍源の

頼朝公の御内みうちにて 関東一の旗頭

智勇兼備の大將と 世にも知られし勇士なり

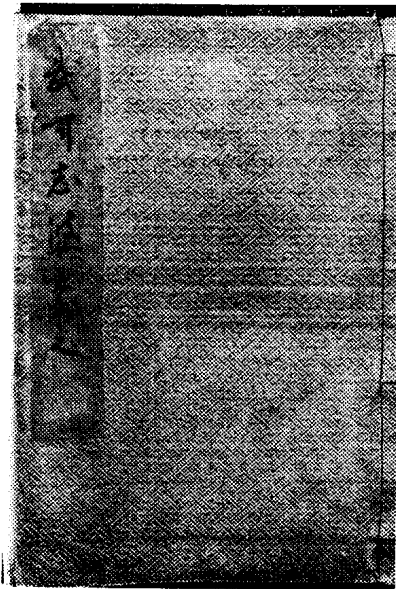
されば元暦元年の 源平須磨の戦に

功名ありし物語 聞くもなかなか哀れなり……。

(熊谷直実)

これについても、私は父の真似をして歌い、堀内敬三氏の採譜と、専門家に比較してもらったが、大体に似ているの事であった。戦闘に於て喚声は刀槍と同価値の武器である。人間の本能から、戦う時には絶叫し、声をかぎりに敵を威圧する。軍歌も同様であり、また行軍の折など、ひどい疲労も、歌いつつ歩けば、かなりカバー出来て、疲労を軽減、危地を脱することは、軍隊生活をした者の、多く経験しているところである。

青森の歩兵第五聯隊が、両羽地方に行軍し、羽後と陸奥の境界の山脈、矢立峠を越えた。時は明治一三年、たのみの地図は不完全、兵隊の誰もが、この土地には全くの不案内であった。予想とはひどく違った大難路で、兵士の



逸見・武川国学集団中の
共同著述の書『武可志婆
奈之』

疲れは甚だしく、事故寸前に迫った。引率者の大隊長木下忠信少佐は、歩調に合わせて、歌か何かを歌ったら、疲労度も少なからうと思いついた。しかし明治のはじめとて、この聯隊には歩調に合うような軍歌はまだない。そこでこの地方で行われている「最上のお山詣り」の「懺悔々々六根清浄」という、四分の二、八拍子の掛声を、隊長の命令で、声を合せて歌いつつ歩かせた。兵隊たちには勇気が加わり、心も軽くなり、難路をやつとのこと踏破し得て、犠牲者を出さなかった。

〔『耳の趣味』鈴木鼓村著、鈴木鼓村は京極流箏曲の創始者〕

これは難路との格闘における自彊術で、この相手を敵にかえれば軍歌となる。戦国時代の軍歌には、自己の力を増加し、敵の力を減少させ、武士の名誉が加わり、主家、祖先への孝道が結合している。

(一二) 新府城に拠る逸見武川国学集団

八嶽連峯中の最高峯の赤岳から、噴出した溶岩流は、次第さがりになって東南に延び、七里岩高原を作る。牛の舌の如き形で、その先は細く尖る。七里高原の先端に直面する時、その右側は、塩川が削り、金峯山・茅岳の連峯との間に塩川谿谷（逸見筋）を刻み、左側は釜無川が削って、甲斐駒・奥千丈などの峯々の間に釜無川谿谷（武州筋）を刻む。この両谿谷の合する所、即ち塩・釜二川の合流する所が、大体に武田時代の岩下郷（徳川時代の岩下村、明治時代の更科村、現在の葦崎町岩下）である。延びた七里岩高原の先端から赤岳の方へ、約四キロの位置、高原上の小山が、武田勝頼の築いた新府城である。武田滅亡史上最後の二大悲劇の一は新府城、次は天目山の田野の断末魔となる。しかも田野・新府は一体となり、死の一步手前の悲哀の強烈さは、新府城を去る勝頼の心を狂わせるばかりであった。逸見・武川国学集団は、この新府落城の懐古といった気分、「武田家旧臣の子孫」の気持を加え、結ばれていたとみられる。「葦崎市の名称を新府市に変更することが、甲斐の政治史・武田滅亡史から、最も適当」と、長年にわたって私が主張し、葦崎市長横内要氏



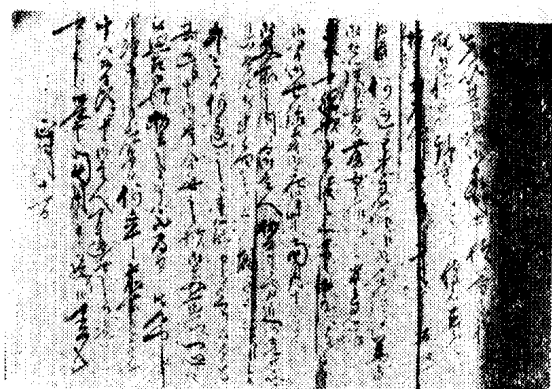
逸見・武川国学集団中の詩集

に進言した事の一部は、こうした点にもよる。

逸見筋・武川筋の谿谷・高原の上、高峯の裾には、村々と古い社寺がある。そこには武田旧臣の子孫が四〇〇年来住んでいた。その中の神主連中、名主連中が、いつしか寄合うようになり、国学に興味を持つ僧侶をも加え、別に名はつけてなかったが、「逸見・武川国学集団」といえる内容の集合体となっていた。結社には、徳川幕府の眼（甲府勤番支配）が光り、後には、勤皇の山県大弐などの事件によって、疑惑を受ける憂いがあった。この集団は、各村の資産家で学問好の名主が、経済面をまかない、頭が良く国学研究に興味をもつ神主が指導し、相互に国学や漢学、和歌・漢詩等の研究・創作を進めていた。学問好きの長百姓の連中もメンバーである。江戸からは大田蜀人・橘千蔭・石川依平・堀秀成・加茂季鷹、橘隆興……などを招聘し、趣味的の研究、和歌、興（狂）歌、漢詩、擬古文などの草稿を、今日に多く残している。

塩川・釜無川両谿谷の合する七里岩の先端が岩下村。塩川の谷を進めば佐久口、釜無川の谷をさかのぼれば諏訪へ出られる。全く扇の要の如くで、国学集団の運営にも、甲府盆地への連絡にも、岩下村は重要な地点であった。

ここに日本の勝手三社の内の甲斐の勝手明神が鎮座し、「天禄元年二位中書記本願」と柱に大きく彫られた日本最古の石の鳥居があり、この鳥居の前が、佐久道・諏訪道の分岐点であったらしい。神職の腰巻因幡守正興は従五位下、優秀な若い国学者で歌人、岳父の小池伝右エ門富章は、武田旧臣の子孫の名主、特に富裕であった。かの本能寺の変の直後、徳川家康が入国の時、逸見・武川両筋の神職代表の腰巻正興の祖先の丹後は、家康に謁して画策する所があり、正興家は甲斐神職中の名家だった。「富章・正興」・「好尚・富章・正興」・「富章・正勝・好尚・正長・正興・正



逸見・武川国学集団の間の手紙

辰」等それぞれの合作の詠草が現在まで残っている。

早春霞 春来ぬと 四方に霞の たちこめて 朝日にほへる 天の香具山

富章

今朝ははや 霞の衣 たち初めて 春来てけりな 四方の屋の端

正興

雪中若菜 降置ける 雪に若なを 摘まぜて 帰るは春の 花かたみかも

好尚

もえ出る 雪間の若菜 たつねつゝ 摘も残さぬ 里のたをやめ

富章

ふくしもち かたまもとりて 雪のふる 吉野の若菜 摘に行かも

正興

同じ題で詠じ合う親しき、兄弟の如くであった。従ってこうした逸見・武川国学集団中で、嫁とり婿とりも多く行われた。特に、

詠金峯山 爪木こる 人や暮ても かへるらん 黄金の峯の 雪の

ひかりに 富章

新府落城の折 「見返り塚」の 駒とめて 今をかぎりと かへりみし 歎ぞ塚の 名に

勝頼夫人の心を 残りける 正興

の如き関係は、全く父子そのものであった。

逸見・武川国学集団の成員中には、漢詩、俳句を嗜む者もあり、結局、『七里岩詩、

歌詠草』の如き、漢詩・和歌・俳句混合の、同人雑誌的の物も残されている。

『七里岩詩・歌詠草』は「新府懐古」の題で、次の詩の、

残徬遺墨緑苔繁 弔古雙襟涙有痕

興廃唯天君勿恨 剛風英俗至今存

は郭内石黒成一の作。石丸確、金子忠告、三間義、富岡芳斎ら計一二名の詩が続いて記される。その後、

鳳嶺暮雪

石原嵩山

崢嶸鳳嶺脱天清

積雪玲瓏画不成

高潔風情出塵界

暫時勝景一嶺明

八嶽晴風

小野秀穎

嵯峨八朶挾蒼穹

雲葉吹消洞口風

隱々層嵐凝水散

芙蓉峰外見芙蓉

釜川釣魚

八代年清

積雪半融駒鳳嶺

釜流南岸柳糸烟

游魚受鉗知多少

屢下釣竿斜日遥

最後に、積非一の「不二夕照」の七言絶句がある。「新府懷古」が一篇、「新府春祀」一篇以外は、鳳凰山・八嶽・釜無川・富士と、すべて新府城を取巻く山川である。逸見・武川国学集団の郷愁の中心が、実に新府城にあることがこれ等から知られる。葦崎市を新府市に、名称変更を願う筆者の気持は、過去からの心に外ならぬ。

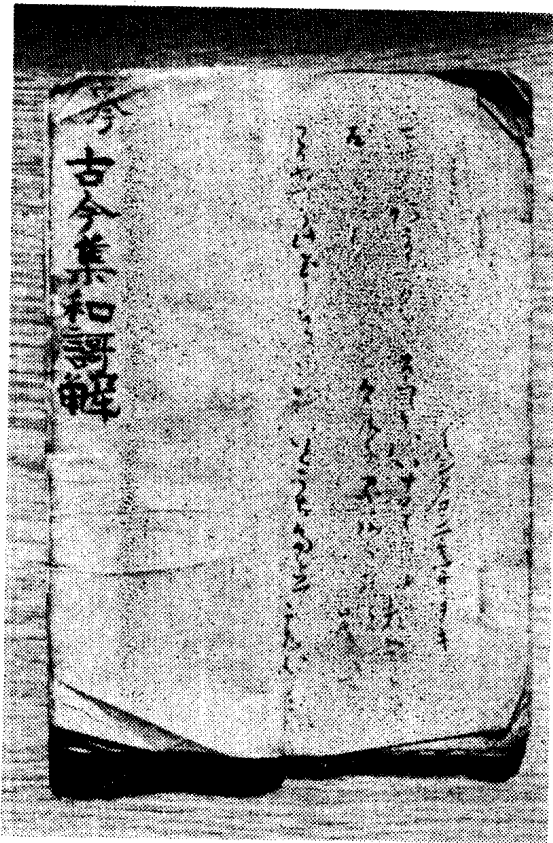
和歌の作者は五人である。

君か代は 千代に八千代を 音にこめて 小松引く野に 鶯のなく(釈国雄。「早春鶯」僧侶と思はれる)

春ことに かすむ古城の 山桜 花の昔を しのびやはする(ます子。「寄花述懐」)

五一首中、ただ一首の女性作だが、この古城も新府城とみらるる。

次に「俳諧発句新府八景」として、



『古今集和歌解』

西森春曙 花盛り あかつきはやし 西の森

彦貫

御牧秋月 牧の田や露みな稲に 成る月夜

文代

釜川釣魚 箸とれば □(不明) こゝろや 柳かげ

為春

八嶽晴嵐 一あらし すぎてあとから 春の風

可転

富士夕照 茜あかねして 日かげ残るや 秋の富士

幾秋

新府懐古 神社まで 昔ぞ恋し 山さくら

清雄

の如くつらね、ついで鶯花庵芭雪、芦雪庵輕簑から閑々坊、匏齋に終る一二句(一二二人)が記してある。

これらは、「淡滄堂」と柱に印刷してある野紙に書かれてあり、何部かを筆写して、集団中を回読していたものか。

かの一宮村の神職の峰城伴希真と小池伝右衛門富章の協力による『唐詩選』・『枕草子』・『理慶尼の記』なども、これに類似し、私費による出版で、組合員に分与したらしい。板木は阿礼村の文庫蔵(富章屋敷内)に収納してあったが、明治三十一年九月の大洪水で流失した。前記の歌稿その他によって、大体は知られるが、矢崎好貫・輿石守郷・八代駒雄・小尾保教・生山正方・阪本正平・栗原信敬(栗原正信の父。栗原松枝の祖父)・越石保恭・植松・篠原・曾雌・黒倉などと多くの氏名が見えるが、資料の保存が甚だ悪く、不明瞭の部分、回覧によるあちこちのムシレなどがあって、甚だ残念である。

(一三) 女性の豪華な手紙

逸見・武川国学集団中に女性の組合員がかなりいた。これは山国の甲斐国であり、当時としては珍しいことのように思われるかも知れない。それらの女性は、神主の娘、名主の妻や娘などといった女性であった。岩下村近辺では小

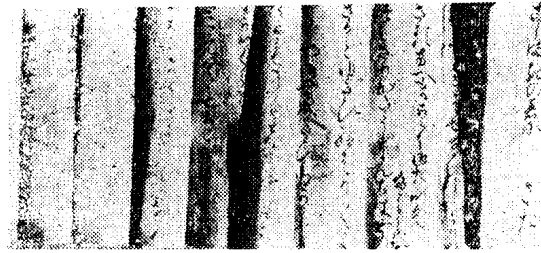
池たけ、小池むめ、栗原ちよ、波先なみさきのさだなどと、かなりの数であり、その名簿は阿礼村文庫にあったが失われた。栗原ちよは栗原伝左エ門の娘で小池伝右衛門富章の妻、小池たけは富章の娘で、腰巻正興の妻であった。これ等の女性は、『源氏物語』・『枕草子』・『理慶尼の記』などを読み、和歌を詠じ、過去の女性の心を知り、当時の女性の進路を考えたらしい。その詠草・手紙等は、阿礼村文庫に多量に所蔵されたと吉章は語るが、洪水で流失し現在は残る物は僅である。

文化・文政頃、現在の韮崎市韮崎町は、「なみさき」と呼ばれた。手紙の表書きは、

いはしたの里　こしまきの　君にまゐらす
なみさき　さた

とある。仮名書の文字は上掲の写真の如くに美しい。当時の女性のならわしとして姓は記してないが、小池ではなからうかと思う。

ひと日とはせ給ひしをりは、さる方へまかで、御たいめ給はらず、つみさがたうなん。こは世のさかとゆるひ給はりてよ。いでや御世界たひらかにおはすらんと、おしはかりたいまつりて、いとうれしうも侍るかな。ここにもさせるまかことも侍らぬ物から、さいつころより、母とし、心地例ならずおはして葉のわざもてあつかひ、今はやうやう、怠りさまになりにて侍れば、浦しまのうら安うおもほしてよ。さて又、御いとまもをはしまさば、あし垣のとり遠からぬ程にわたらせ給ひて、此ころのつれ／＼をもなぐさめ給へ。させる主あるじもうけも侍らねど、ひたふ



「さた女の手紙」

るに、待たいまつる。さればをくれし雁のつばさにかけて、

宿の名の うらさびしさに 今日もまた しぐるる空を ながめくらしつ

ともうしきこえむも、おこがましや。万はちかうさふらひてなん。あなかしこ

十月ついたちころ

さた

岩下のせんしやうに まるらす

甲斐国のなみさき(今日の韮崎市、韮崎町)にこれ程の文章が、これ程の筆跡で書ける娘があった事に驚く。大学国文学科卒業の優秀な女性も、これ程の擬古文は書けそうもない。「御たいめ」・「ゆるひ給はり」・「たいまつりて」・「待たいまつる」を誤とした学生さえあった。用紙は豪華で、淡黄色の地、紙高の低い女性用紙で、この巻紙には蔓草模様が、横に続けて摺出してあり、その緑色は高雅で、摺りの上からも、当時の最高級品である。状袋の表には、藍色で薄の葉の如きものが、封筒一ぱいに刷られ、穂らしいもの、絵の落款も刷出されている。状袋の裏には「溪子」とも読める小さな印刷文字が見え、全く、江戸の豪商の娘などの用品を思わせる品である。甲州は江戸との交通が繁く、第二の江戸の如くで、旗本が勤番支配となり、徳川の直轄地であった。豪商や名主総代などの家には、江戸の高級品、江戸文化の粹といった物が屢々保存されていた。かの「神田囃子」が江戸旗本の二、三男である甲府城勤番士によって甲府へ持込まれ、「甲府囃子」となっている事なども、類似の事実である。

逸見・武川国学集団に関する資料を、現在家蔵していることは、前記の「さた女消息」の如くである。これらは事情があって、現在は一括して、筆者の長女の鶴沼の家にて保管させてあり、資料として自由に活用出来ない事情にある。いずれ、この集団と関係のある文化・文政頃の国学者の書簡類と共に重ねて発表するつもりである。

甲府城の勤番士は、江戸旗本が交替して勤めていた。甲斐国には、田安、清水領があり、その名主や郡中総代などは、年に何回も江戸に出で、甲州の平野部は、言わば、江戸文化の地続きとも言えた。

(一四) 『甲斐国志』の編纂と歌謡

「逸見・武川国学集団」といったものは、元禄頃から、次第に結成されて来たものか。山県大弐（一七一八—一七六七）などは、このような集団の雰囲気から発展した反幕府の勤皇思想かと思われる。山県大弐の生誕地の竜王村篠原は、塩川・釜無川の合流点から約五キロの地点で、大弐は、その郷土であった。徳川家によって亡ぼされた武田の旧臣であり、幕府直轄地（甲府勤番支配）であるので、不満は国学集団中にもあった。油断のない警戒を続け、それをわずかでも表面には現さず、むしろ勤番支配の命には、喜び従う態度をとり続けていた。

文化三年（一八〇六）松平伊予守定能が、甲府勤番支配とし、幕命により、武田家滅亡の折からの史料を集め、『甲斐国志』編纂の事をはじめた。滅亡の折は、掠奪と戦火により、新羅三郎義光以来の古記録が、全く無に帰した。しかし僅に残存するものもあった。この時甲州人としては、西花輪村の内藤清右衛門、小河原村の神主の子の村松弾正左衛門、谷村の商人森嶋弥十郎の三人がこの事業を助けた。幕府方は、松平定能の家臣三名が定能の側近として働き、全一二三巻の大著を完成した。

甲州人が僅に三名であった事は、第一に幕府の発意の『甲斐国志』の編輯であり、その底流には、やや冷いものが、武田旧臣の子孫にはあったらしい。第二には甲斐性——甲州人独得の意地が働き、個人の古史料所蔵者の中で、秘して史料を出さなかった者もあった。実に小池宇右衛門久胤の家（富章の父）もそれであった。『甲斐国志』の編輯は、武田側には、痛しかゆしとか不満足——といった、当時の言葉が残っている。

『甲斐国志』には、歌謡は殆ど採録されていない。僅に次の二篇が目につく。

▽あの山見れば 思ひ出す わが殿は あの山かげで討たれた。

▽敵にもし せり詰られて 日の暮れば こころをゆひて 夜の明をまで。

右の「あの山」の歌を、生き残りの武田勝頼の家臣が、亡き君である勝頼の死を痛んだとする解釈は誤である。これは武田の直臣の、山岳戦での死を、生き残ったその直臣の家来が、歎息したものである。

「敵にもし」の歌は、山岳戦での武田流の戦法を教えたものである。すなわち、

敵が何処までも追撃して来て、夜となった場合には、夜の暗さの中で、バラバラの行動をしてはならない。「此処居」を結って、その中にまとまってい、夜明を待って行動せよ。

の戦法の教えである。「此処居」とは、山岳の樹木・岩石などの地物を利用しての柵を結って、外敵の侵入を、多少とも、喰止める障壁のことである。武田家の山岳戦のこうした歌は、多いと思われるが、そのただ一首だけが、『甲斐国志』に、事々しく記されている点に、史料を秘して出さなかった事実が、特に注意される。『甲斐国志』以外で次の歌も伝わる。

山は腰で 平地は肩で 歩むもの 疲れ少く 勝つ道と知れ

(一五) 『逸見古歌抄』

武田の旧臣で、主家滅亡後も甲州に踏みとどまっていた者の子孫は、多くは名主などになっていた。甲州には庄屋の制度はない。そうした家に、武田時代の古記録が残る。

天正三年(一五七五)織田・徳川の連合軍は、三河国長篠で勝頼に勝ち、七年後の天正一〇年には信長・家康は、勝頼に勝つ自信と心のゆとりを持って、甲州攻を行い、信玄時代の金城湯地に殺倒して来た。古記録を奪い、家に火をかけ、甲斐一國を、焼け野、焼け谷焼け山とした。武田家臣・農民・婦女などの集団自殺の場所——じげえざあ 自害沢・自害

谷・自害山・自害原・自害森……はあちこちにあったらしい。

武田信玄が男色の相手である春日源助（後の武田の部
将の高坂弾正）に与えた「男色の誓詞」が、現在東京大学の史料編纂所に保存されているなどは、古文書掠奪の証拠であろう。従って武田史料を家に伝える旧家では、他見を許さず、幕府の力をもってしても及ばず、『甲斐国志』編纂の場合にも、史料はないと言いつつ、それとなく逃げた者があり、その史料の一部こそは、『逸見古歌抄』の基礎となっている物である。

『逸見古歌抄』は筆者方の所蔵であるが、断簡であり残欠で、昭和三年頃に、藤田徳太郎君（歌謡専門。浦和高校教授。故人）に見せた後、戦火で失われたと思っていた処、その副本をこのたび発見した。

天明八年、逸見筋岩下村名主宇右衛門久胤とその子伝右エ門富章とが、家伝の古記録から抄出したもので、阿礼村の文庫蔵に浸水した事があって、水による被害とムシレがあり、その紙は、綿の如くふやけていた。その中で、目につく歌を挙げてみよう。

▽佐久口^ぐチャ津金で 諏訪^ぐ口チャおりい（「おびよ」とも読める） 小池の一堂 堅めた山を ねらう奴ばら

ズンズリバツチョロ 突つころがせ デンボーロ エイ、エイ、エイ、
エイ、エイ、オウ。 げにや ミタ照覽だ、ミタ照覽。

「ズンズリバツチョロ」、「デンボーロ」は、武田時代の逸見・武川筋の方言かと思われる。「容赦なく、谷底へ蹴落せ」などの意味か。「ミタ照覽」のミタは、「御旗・楯無」の省略である。武田家では、源家伝来の「白旗」と「楯無鎧」の二品を、守護神とし祭っていた。武田武士は、生命をかけて誓約する時には、

「御旗・楯無照覽あれ」
しやうらん

と、言った風習を取入れたものらしい。従って、「御旗・楯無照覽あれ。御旗・楯無照覽あれ」と略さずに歌うのが本来らしい。

八嶽の南麓、赤岳から約一四キロのあたりに、小池郷こいけごうがあり、八嶽に向って右方に津金、左方釜無川谿谷の武川筋に折居郷がある。小尾は塩川上流の山中の寒村。元亀頃には、釜無谿谷の上の七里岩高原に出て来ていたようだ。

『甲陽軍鑑』の品第二三に、

天文十一年八月・九月両月休息有て、諸侍以下を休らるべきと有ル処に……たと候へば、甲州にては、津金一党、おひ一党、小池一党、武川衆、ひがし郡にては、大村一党、辻一党……

などとある津金、おひ（おりいかもしれない）、小池一党、武川衆などが、佐久口・諏訪口を防備していた時代があり、その折の軍歌とみられる。これ等の一党は親類関係で、防備の中心的の位置は小池郷（今日の高根町小池）らしい。甲斐国の北西部の山岳地帯を堅めてい、寄せる敵を待つという山岳の戦法である。上記の歌は、山の斜面で、怒号する如くに歌われたものか。

（一六） 故郷の恩恵を最大利用の軍歌

現在の新人の多くは、世界人的で、故郷を喪失して、また故郷にこだわる事などを、文化人として、恥ずべきことのようにも考えている。

会社の営業方針に従い、転々任地をかえるサラリーマンと、その子供たちはあはれである。小学校時代から、東に西に北に南に、何校となく学校をかえる。さらに中学・高校にも及び、故郷・祖先・墳墓の觀念など全くなく、「今住む処が即ち故郷」の気持が現在の都会人である。甲斐の八嶽・金峯山・茅岳・七里岩高原の谷・斜面・岡などに住む者は、大地から湧き出る清水を、母の乳房同様に感じてのんで育ち、住居の土地を、親の遺体の如くに思う。墳墓・墓石をも、わが庭と庭石の如くに親しんでいる。亡き父母の墓石に語りかけ、悲喜を、墓石に訴える若者も、過去

には多かった。こうした事は、元龜・天正時代には、一段と強烈であり、祖先の墓石を、移り住む場所に背負って運ぶが常であったと見え、正中（一二三四―一三二六）・享徳（一四五二―一四五五）の年号入りの小さな五輪塔が、筆者の家に現存するなどは、この心のためである。『逸見古歌抄』は、この感情を強く歌う。元龜・天正頃は、わが住む土地の微細な点にも良く通じ、その土地の特殊性を誇り、戦闘の場合に、その特殊性を利用し、祖先の恩恵と信じて、敵を圧倒する方法をとったらしい。

▽佐久口^{ぐく}チャ持場だ 来候奴は ズラッコケ通して 押っこむチチンボー 喃^{のう}心地よや 皆ごろし。

「ズラッコケ」とは、富士山の^{おおさわくす}大沢崩れの如くに、山の崩壊し続ける所らしく、「押っこむチチンボー」は、追いかむ「蟻地獄」で、結局は、自然の崩壊場所から、大きな蟻地獄のような谷へ追こみ、皆殺しにするの意味とみえる。

▽山での合戦 山での合戦 おらん党は強えエぞ、小池の^{いけ}一党小池のおらん党は山の武士 エイ、エイ、エイ、
にやミタ照覧だミタ照覧。 エイ、エイ、オウ。 げ

こうした資料については、甲州の旧家だった方々へ、資料教示の手紙を出したが、類似資料絶無の返事であった。私の弟腰巻章雄（勝手神社神職）方の縁続きだったので、故小尾範治氏（昭和六年頃、文部省社会教育課長。後にNHKの教養部長）の遺族や、甲銀^{かぎと}行頭取だった小尾浜吉氏関係その他へも連絡したが、得る所がなかった。高根西小学校創立百周年記念事業の小尾滝三委員長と同姓で、東京在住、私も旧知の関係で、小尾庸雄氏にも、細かに歌謡を書き入れた入念で長文一米の手紙を差上げたが、何の返事もなかった。一片の藁にもすがる気持で、電話で庸雄氏に催促した処、

貴下の手紙ではじめてその事を知った。一体に小尾の、甲斐国における本拠の位置は、何処であるか。
のように、あべこべに、小尾姓の先祖の位置を聞かれるという状態であった。続いて、

拝啓 先般は御懇書をいただきましたので、早速郷里の親戚へ申送り、調査をたのみましたが、御報告するほど

の資料がこず、誠に申訳なく存じておりましたところ、先日御手紙を随筆の資にしたいから返送せよとのことで、早速御返ししようとして捜しましたところ、大変な失態ですが、見当らず、誠に何とも申上げようありません。

私の家系にとっても、貴重な物でしたので、大切に保存しようとしておりましたが、大学の、その方の方にも、見せようと思って、学校へ持って行ったのが、運のつきと申しましようか、私の手落でした（下略）

小尾 帛 雄

小池藤五郎先生（日附なし。消印）
48・5・2日

この例でもわかる通り、資料紛失、研究の困難は覚悟はしても、新資料を握るところか、悪くすると手持の資料をも失うという現状である。とにかく上記の如くに、三篇の元亀・天正時代の軍歌らしい物をあげ、資料出現待ちとする外はない。

山岳の砦を守る者であるから、メロデーは $\frac{2}{4}$ 拍子といった処、それとも謡曲調・幸若調を加味したものかも知れない。

（一七） 自害沢の名

天明八年、家伝の古記録から、宇右エ門父子が抄出したと記してあるが、それは天正頃の僅の歌で、その後の方には伝右エ門の思いつきで、彼と同じ時代らしい歌謡を書入れてある。

▽盆が来候ぞ 盆が来候ぞ 自害沢へ参らむ 人目忍んで 珠数かけて。南無、釈迦・弥陀、ナム・ナム・ナム・ナム・ナム。

この歌、本領院日義大徳、口ずさび給ひ、人々に教へて、各地の自害沢じげえざあにて、ひそかに亡魂を弔はせ給ふ。

自害沢は、武田旧臣・領民・老若男女の集団自殺の場所で、滅亡当時は、国内のいたる所にあつた。不吉な「自害」の文字は年と共に削られ、仏・供養・念仏・祈り・埋め……などに変じた。甲斐国を領有する大名も、その方法をとつた。滅亡後、二二四年、『甲斐国志』編輯着手の頃は、「自害」を冠する地名は、人為的に非常に少くされ、僅に二ヶ所が『甲斐国志』に記される。意識して避けたいらしい疑も充分にある。

○自害沢二巨摩郡西郡筋——駒場・築山二村ノ界ニ在リ。又、築山東南ニ御崎沢、仏教沢アリ。合流シテ用水トナル。〔『甲斐国志』山川部第十二〕

○自害沢二八代郡東河内領——無名沢、二所柴草南山ヨリ出ヅ。以上ミナ大磯川ニ入ル。〔『甲斐国志』山川部第十四〕

右に見える「仏教沢」は勿論のこと、「無名沢」は、「無明沢」か。即ち集団自殺・織田えの怨恨の迷妄によってはじめ附けられた名称で、「無名沢」は、後年の訂正名らしい。

その上に不思議な事には、侵入したばかりの織田軍が、最も残虐を極めた佐久口・諏訪口附近には、「自害沢」の名が残らないことである。八嶽・駒嶽・金峯山・茅岳・甲斐駒・奥千丈から、甲府近くには、この名がない。それだけ、後の領主によって、不吉な地名として、訂正されたらしく思われる。

(一八) 高根町西小学校を煩はす

山梨県北巨摩郡高根町高根西小学校は、八嶽の南麓風光絶佳の妙境にある。ここに、康平二年(一〇五九)に逸見冠者義清が建てたという熱那あんな総社があり、社領五石、社地二五、〇〇〇坪と記されている。この神域のとなりが高根

西小学校で、学校の位置としては、理想的の場所。その南一キロの処が、元亀・天正頃に私の祖先の住んだ小池郷（江戸時代の小池村、今は高根町字小池）である。空気は清く水は澄みとおる。夢にみる私の第一の故郷である。

高いぞ広いぞ 八嶽の峰まで

ぼくらの町は つづいているよ

のびよう正しく のぼろうつよく

熱那のお森が はぐくむ西小学校（第一節）

の校歌を私は作った。それは、今から遙か昔の事であって、平井悦太郎・土屋幸雄・五味孝一先生と、校長先生方も変り、清水市朗さんその他の、PTAの方々も変った。この土地、この学校の校歌を作らせていただいた事は、私には先祖からの芳縁によるものと、日々感謝している。

この木立 わが先祖たちの 住みし地か 幻にみる 天正の昔
が私の率直な気持である。

西小学校創立百周年記念事業実行委員会と、五味孝一先生から、昭和四八年一月一九日に御連絡があり、校歌を巨大な石に刻むので、その揮毫を求められた。この時に『逸見古歌抄』が私の手許では、偶然にも発見されていた。私の胸は奇跡におどり、元亀・天正の幻が左右に交錯した。

「天の助だ、祖先の冥助だ。疑問の『自害沢』も必ずわかり、『逸見古歌抄』の軍歌その他も、きっと学問的に明確になるだろう。他にも資料が見つかるう」

このように楽観した。そこでうるさいほどに、繰り返して手紙を書き、五味孝一先生におくった。その目的は、校長先生を通して、実行委員会の小尾滝三会長、伊藤重幸、中沢孝次副会長、中島幸夫氏その他の顧問の方、中島義貫、

五味義親、古屋一治の諸氏、つまり一人でも多くの方々の耳に響けと、手紙を出した。ただ「小池村に小池なし」の昔からの言い伝えの通り、小池姓が、実行委員会組織中に、全く見当たらないのが、淋しかった。

四月三〇日の祝典の前から、鉄道ストで切符が買えず、予定を立てながらも、参列出来なかった。参列して校長先生その他PTAの方に、くどくもお願ひ申したかった。元龜・天正時代の軍歌と、八嶽・金峯山・茅岳の谷々の中の自害沢は、依然としてわからず、探索の難、研究の悲痛さに、うちのめされた気持であった。

(一九) 本領院日義と血脈

武田家の滅亡した時、小池郷は灰燼に帰し、一族は殆ど全滅した。「小池村に小池姓なし」はその為である。天正の昔に、本領院日義こと小池主計正義氏は、二十人衆頭目附で、滅亡時に生き残り、身延山に入って法華僧となった。信長の代官河尻肥後守の恐喝政治の目をのがれつつ、極秘のうちに報復の血盟団を組織した。かの本能寺の変が、五日後に甲斐国に伝わるや、深山幽谷に潜む敗残傷病の武田旧臣の甲斐性かいしやうにすぎり、当時最高の装備をもつ河尻軍を甲府の古城に奇襲し、河尻肥後守康隆を捕え、かつて武田信玄の遺骸を、火葬にした場所の前で処刑した。更に河尻の全軍を殺戮し、主家を滅亡させた怨を晴した。

間もなく彼は甲府から消え去った。塩川谿谷をはさんで新府城に向って聳える勝頼峠(今日の呼び名)上の峠寺とうげだと称する自己の庵室に潜み、法華経読誦、主家の菩提を弔う外はなかった。

「甲州大いに乱る」——の報を得て入国して来た家康は、信玄の菩提寺塩山の恵林寺で、武田旧臣に会い、「家康公に対し、謀反の心なき起請文」を出させた。日義も主計正義氏の、ありし日の名で起請文を差出した。しかし家康方の注意は日義に集り、峠寺の老松の梢で、鳥が不吉げに鳴き続けた天正十二年五月十二日、庵主の日義は、新府城

に直面し、腹をかつさばいていた。袈裟・衣はキチンと畳んで、須弥壇におき、三尺七寸寿命在銘の野太刀を左腕にかい込み、うつ伏していた。

▽盆が来候ぞ 盆が来候ぞ 若武者どもよ ささげ候へ 棚たな(精霊棚)に花押かきはん 血脈通じて 手柄も立とう
エイ、エイ、
エイ、オウ げにやミタ照覧だミタ照覧。

こそは武田流の花押に関する古来の信仰である。系図の赤い線を血脈けちみやくという。新しく花押を定めた若武者たちは、精霊を迎える盆に、花押を精霊棚に供えて血脈を通す事になっている。花押を定めながら、それを行わないと、祖先は悲しみ、血脈断えて、武功もなく、その家亡ぶとの信仰が、「武田流花押法式」にある。この歌謡も、元亀・天正頃の物であろうか。

(二〇) 『甲斐盆踊歌』

『甲斐盆踊歌』中には、家庭関係、嫁姑の間柄、下級農民生活、阿礼村の家名で呼ぶ名主の家に関する物が主、わずかに次の三首は、

▽あの山辺に 咲くつつじ わが子の血でござった うらめしく候

▽笹子峠で 甲斐性なしめ 小山田の奴 勝頼さまを 裏切り候

▽わが子をば 信長めに 討たれたぞよ 天罰くだる 思いしかったか

母や老婆などの心をうたい、武田家滅亡、本能寺の変の直後のものらしい。これらより、遥かに後年の物として、
▽先祖の墓はかしよへ 参らん嫁よめン女 仏みはなす ウンマも出来ず 産んだ野郎やろうこ子も育たねえ。

「ウンマ」は母乳。「出来ず」は「出ず」の意味である。甲州方言では、可能の「出来る」を「分ぶん泌びつする」の意味

と完全に取違えて使用し、「部屋の外へ出来る」という。「野郎ツ子」は「男児」のことである。

▽嫁ン女極楽、盆盆三日候。喃オッコおあがり、オオデロ様。南無釈迦・弥陀、ナム、ナム、ナム

「オッコ」は「菓子」、「オオデロサマ」は、「人形様」である。盂蘭盆の三日間は、どのような事があっても嫁を叱らず、旨い物を食べさせ、お人形様の如くに大事にして、先祖の霊にみせる。これは先祖の血脈を子孫に伝える大事な嫁であって、嫁ン女優待は先祖が喜ぶためである。この歌は、大体に慶長頃のものか。

▽粟ぼっそうじやア 尻が出るばかり 腰がよじくれ くっちやぐ目玉 名主どん頼んだ 銭にヨウ早ヨウ。

「粟ぼっそう」とは「粟のみで、米を少しも入れずに炊いだ飯」。貧しい水呑百姓の常食だ。「よじくれる」は「縊るようにねじれる」意味で、体力の消耗のこと。「くっちやぐ」は「閉じる」の方言で、疲れて目があけていられない意味である。

年毎の塩川の洪水で、堤防が欠壊する。甲府御役所からの「お救い普請」となり、名主が小前の百姓を人足とし、工事を行った。その賃金の手早い支払を要求する意味の歌である。

▽阿礼の椿は ケツよりでっかいネ 勝手の御神木カ 二疊敷。

▽岩下村が 流れど焼けどネ 助けたいのは 宇右エ門さんの質蔵

甲府勤番支配の許可を得て、名主宇右エ門方では、質屋を兼業していた。徳川時代、甲斐国の質屋は、今日の銀行業と同様で、官許であり、多くは名主の兼業。大きな村には、大抵一軒の質屋があった。その意味で質草の安全を願った歌だ。このあたり、文化・文政（一八〇四―一八二九）の盆踊歌である。ただし次のような異体の物もある。

▽新府一目の あてらでえらの寺平（勝頼峠） 日義大徳 お寺を建てて 日夜供養を なさったあげく 腹を切ったは 何ちゆうこッだ 武田亡びて 世は地獄。

これは七音九句、五音一句である。七七七五の四句が、盆踊歌の普通の形である。前述の「阿礼の椿は」と「岩下村が」は四句、「新府一目の」は十句で、共に後年の物、六句の「山での合戦」・「佐久口くチャ持場だ」は『逸見古歌抄』中でも古く、それより七句・八句のものが現れたが、メロディは簡単で、一・二句の変化では、問題なく歌えたようだ。

(一一) 純日本のもの

前記の『逸見古歌抄』中の歌を、直に軍歌と断ずる事は出来ない。一応軍歌らしい歌謡として、類似の歌の出現を待っている。

明治天皇の御製に、

いくさ歌 うたひかはして つはものも たむろのにはに 月やみるらむ

とある。黙っていたのでは戦えない。護国の精神をたぎらせる薪が軍歌である。『逸見古歌抄』では、「突っころがせ デンボーロ」と、自信をもって命令し、「ズラッコケ通して 押っこむチンボー」と、わが手の内を語るころに、自信の底から勇気が迸りでている。更に「山での合戦、おらん党は強ええぞ」に至っては、戦はずして、敵を呑むさまである。軍歌は自己に言い聞かせる自信の立場と、優秀性による必勝の結果の招来である。ワーツという喚声、突貫の聲が、その最後の瞬間である。明治軍歌は、外国調の軍歌で、新体詩の影響をうけた、言わば欧米風の軍歌であるが、『逸見古歌抄』のそれは、『古事記』からの流れを引く、純日本の物のように思われる。類似資料の出現を、ひたすら待ち願っている。

昭和四八年二月一六日、愚弟の腰巻章雄(岩下村勝手神社の神職。実業家)の娘のかえ子と、大窪恭太郎(山梨県の実業家)の次男光の結婚式が、甲府市湯村温泉の常盤ホテルで行われた。誠に好機会と、元亀・天正の古歌謡のことを、式に集られた三〇〇名の知名の方々のうち

の諸氏にたずねた。旧家で伝統の史料を保存されるかと思つてである。昔の小池郷のうちの上黒沢の旧家古屋千秋氏（大阪砕石工業所専務取）その他に、前記の諸歌謡を口ずさみ、それに類似の歌謡、又はその史料があつたら、示教されんことを頼んだが、何一つ新史料らしい物はなく、がっかりした。史料探索には、こうした事が多い。この折、故栗原正信氏令嬢の松枝氏にお目にかかれた。昔お会いしてから五十余年、共に老いてのめぐり会ひであった。これは全く、元龜・天正の珍しい歌謡に出会つたような気がする。持である。「人生ややもすれば、参しんと商しょうの如し」という支那の諺が、人生、史料共に当てはまって、まことに悲しい。

摘 要

- 一、元龜・天正時代の軍歌と断定するには、少しく早過ぎる感じもするが、その歌詞には動かぬものがある。更に類似資料の搜索を続けるつもりである。
- 二、幸若舞曲の「人間五十年」（信長が歌つたという）は、田楽狭間戦の非本格的軍歌とみられる。
- 三、軍歌とは何ぞやについて、考えてみた。
- 四、『閑吟集』・『隆達小唄』は、軍歌には全く縁がないことを確認した。
- 五、『万葉集』・『記・紀』中から、軍歌的の物を摘出し、大伴家持の立場、文学者の素質にふれてみた。
- 六、学者未研究の「トンヤレ節」の、起原と発展の経路を調査した。
- 七、「トンヤレ節」が、「明治夜明けの軍歌」であると共に、元龜・天正の軍歌の系統に属していることを確認した。
- 八、『都風流トコトンヤレぶし』を精査し、新説を立てておいた。
- 九、「逸見・武川国学集団」の存在をはじめて認め、回覧の歌と詩の草稿を発見、漢籍・国書の刊行、そのメンバーへ配布の事をも記した。
- 一〇、「逸見・武川国学集団」のメンバーの大略にふれてみたが、資料を得て、更に正確にしたい。集団所属と思われる女性の和歌と手紙を掲げた。
- 一一、高根町高根西小学校創立百周年行事に便乗して、資料の発見、自害沢等の地名の確認に努めたが及ばなかった。
- 一二、『逸見古歌抄』の発見と、その内容の一部を説明した。
- 一三、勝頼峠、峠寺（日蓮宗）などにつき、古歌謡を通して考えてみた。
- 一四、『甲斐盆踊歌』中の古い物は、元龜・天正に接近していることを確認した。（筆者住所、東京都新宿区西落合一―二七―一二。）
- 一五、『甲斐国志』の編纂と、古史料秘蔵者の関係にふれた。（電九五―一―三五五―一。史料の御示教を願う。）